平成 28 年度第 4 回小学校ゼミナール記録（新田班）

参加者：新田(授業者)，八島(広島大学附属小教諭)，影山(広島大学准教授)，石橋，米山

1．協議事項

広島大学附属小学校研究大会の振り返り

小学校算数科第 6 学年「資料の調べ方」における授業の反省

2．協議内容

2 月 11 日(土)に広島大学附属小学校で実施された，小学校算数科第 6 学年「資料の調べ方」における授業についての反省を行った。本授業は，PPDAC サイクルの「問題化（Problem）」と「計画（Plan）」を意識し，「問いの答えを得るために解決までの流れを見通して，資料から必要な数値を取り出し，その整理の仕方を適切に考えることができる。」ことを目標としていた。本授業における問いは「ぼくらの応援は，カープの選手の力になっているのだろうか。」であり，この問いを算数の問題に置き換え，他者が納得できる答えを導くために，どのような資料をどのように整理し，分析すればよいか数学的根拠を基に考えることができているかを見ることが目的であった。

3．授業内容に関わる議論

〇問題化について

本時の問いにある「カープの選手の力になる」とはどういうことなのか，について議論した。統計的処理とは，仮説を立て，言葉を定義し検証することであると考えると，この問いの統計的な要素を考えた際に，言葉の定義をどのようにするかが問題となった。

児童は 8 つの班に分かれて活動を行ったが，問いに対するアプローチが「得点圏打率」や「勝ち数」，「打率」と班によって異なったため，必要となるデータや基準が異なり，児童による比較検討が難しく，他者を納得させることが達成できたかが曖昧であった。また，野球に興味・関心がある児童からは積極的な意見が出たが，あまり興味・関心のない児童はそれについていけないという場面があった。このことから，問いの設定を見直すことや教師自身が何をどうすれば結論に至るかを明確に持つことの重要性が示された。

〇計画について

本時の問いに対する児童なりの結論を得るためには，言葉の定義，データをみる視点の決定，データを分析する際の判断基準を児童自身が決めなければならない。その際に，視点や基準は班ごとに異なり，それが学級全体での納得に至らなかった原因でもあるという意見が出された。教師によるある程度の視点の限定，「データの傾向を読み取るだけ」など，小学校段階でどこまで扱うのかを明確にする必要があるという話し合いで議論を終えた。

（文責：米山 京香，石橋 一昴）